

東京農業大学125周年記念事業 フランス大使館・東京農業大学共催フォーラム

アグロエコロジーと、1000分の4 土壌イニシアチブ

地球環境保全と食料安定供給に果たす農業の役割とは

気候変動の緩和と地球環境保護のため、仏政府が主導し、日本を含む30以上の国や機関が共同で取り組む「1000分の4 土壌イニシアチブ(※)」。

※世界の土壌炭素貯留量を毎年1000分の4ずつ増加させることで、温室効果ガスによる環境への悪影響を抑制しようとする取り組み。

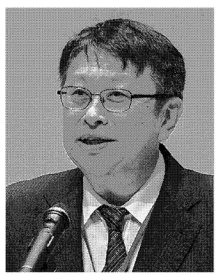
あいさつ

東京農業大学 学長 高野克己

農林水産省 大臣官房 技術総括審議官 西郷正道氏



H.E. Mr. Thierry Dana 駐日フランス大使館 参事官



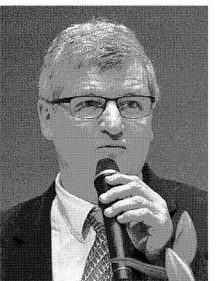
環境省 大臣官房審議官 森下哲氏



現在、日仏両政府や研究者、農業生産者など多くの人が、温室効果ガスの排出削減と気候変動の緩和に取り組むことが急務であるとの認識を共有しています。



COP21で採択されたパリ協定は、産業革命以前からの地球の平均気温の上昇を2度未満に抑えることを目標としています。



講演1

食品安全と持続的開発への挑戦 アグロエコロジー的解決策とは

フランス国際開発農業研究センター 顧問 Dr. Etienne Hainzelin

かつての農業は、大気や水の質を守り、緑を維持して炭素の増加を抑制するなど、自然のバランスを適正に保つ役割を果たしていました。



講演2

1000分の4土壌イニシアチブとアグロエコロジーについての研究、新手法や知識の共有

フランス農業経済 獣医 森林研究所所長 Dr. Marion Guillon

土壌には大気の大気中の2〜3倍の炭素が貯留されていますが、都市化や森林破壊により、その量は年々減り続けています。



講演3

気候変動の緩和と持続的な食料生産のための土壌管理

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センター 気候変動対応研究領域 土壌炭素蓄積モニタリングユニット長 白戸康人氏

炭素は、大きく分けて土壌と植物・大気という二つの場所を循環しています。農地では植物がとどめている炭素量はほぼ一定です。

パネルディスカッション

フランスと日本の農業関係者による議論

- 司会 東京農業大学 応用生物科学部 生物応用化学科 准教授 加藤拓 (Mr. Pierre Pujos)
パネリスト フランス 農業者 佐藤裕一氏 (Mr. Hiroki Sato)
エティエンヌ・エンズラン氏 (Mr. Etienne Enzler)
白戸康人氏 (Mr. Takahito Shirao)
中西康博 志和地弘信



加藤 日仏3人の農業関係者を迎えて議論を進めていきましよう。初めに自己紹介をお願いします。



加藤 今日のお話を聞いても、アグロエコロジーというのは従来の農業とはずいぶん違うと実感します。

佐藤 北海道の十勝地方で小麦やバレイショ、ジャガイモを生産しています。私もビュジョスさんと同じで、一番力を入れているのは土壌管理です。

志和地 一例ですが、食品にも「エコフード」のマーケットがあればいいのではないのでしょうか。

岩永 勝氏 この日の総括として、岩永氏は地球規模の課題を前に各々が連携して取り組むことの重要性を指摘。



ケーススタディー

世界と日本での実践、研究事例

フランス農業省 農業政策専門官、国際連合食糧農業機関 (FAO) アグロエコロジー専門官、東京農業大学 国際食料情報学部 国際農業政策学専攻 教授 中西康博、東京農業大学 国際食料情報学部 国際農業政策学専攻 教授 志和地弘信

講演の後、3人の識者が研究報告や自身の経験を踏まえた提言を行った。クルゼ氏は、FAO専門官の立場で、アグロエコロジーとは科学研究や社会的運動を含む総体であり、農場での活動はその一部にすぎないことを指摘。



岩永 勝氏 企業、NPOなどが結果として、このことを紹介し、私たちは乗り越えていける」と未来への希望の言葉でこの日のフォーラムを締めくくった。